



6. 1・2号墓完掘状況（北西から）



7. 1号墓出土状況（北西から）



8. S K - 179上層出土状況（東から）



9. S K - 179中層出土状況（北から）



10. S D - 157出土状況（西から）



11. S K - 194ナスビ形木製品出土状況（北から）



12. 古墳時代中・後期空撮（上が北）



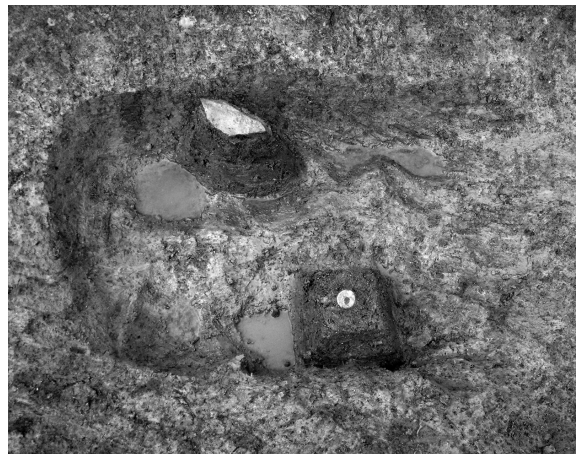
13. S D - 101出土状況（南東から）



14. S D - 101須恵器等出土状況（北西から）



15. S D - 101青銅鏡等出土状況（北東から）



16. 鏡形石製品出土状況（南西から）



17. 中近世全景（北西から）



18. 地鎮遺構出土状況（北から）



19. S X - 51完掘状況（北から）



20. S K - 11完掘状況（東から）



21. 調査風景



22. 現地説明会説明風景（南から）

4. 十六面・薬王寺遺跡 第32次調査

1. 遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高48m前後の沖積地に立地する。遺跡北西部の弥生時代～古墳時代前期の集落跡、遺跡南部の弥生時代後期～古墳時代中期の墓域、遺跡南西部の古墳時代中期～後期の集落跡、遺跡中央部の中世屋敷地（保津氏居館跡推定地）等からなる複合遺跡である。

今回の調査地は、保津氏居館跡推定地の東端にあたる。賃貸住宅の建設に伴っておこなわれる擁壁工事の掘削が遺構面ちかくまで達するため、擁壁部分について発掘調査で対応することとなった。

2. 調査の成果

（1）層序

調査地の現状は畑地と水田の境界となる傾斜部である。調査区は擁壁工事部分の平面プランに則ってクランク状となっている。調査区の延長47m、幅1.6m。

I：黄褐色砂礫土〔検出標高46.9m、以下数値のみ記す〕、II：青灰色土〔46.4m〕、III：灰茶色土〔46.25m〕、IV：灰褐色粘質土〔46.1m〕、V：暗褐色土〔46.0m〕、VI：黒褐色土〔45.8m〕、VII：黒色粘土〔45.5m〕、VIII：淡青灰色シルト〔44.8m〕

第I層が現代造成層、第II～III層が現代水田耕土・床土、第IV層が中世遺物包含層、第V・VI層は縄文時代～古代の堆積層である可能性があるが不明、第VII層以下はベースである。中世後期の遺構は第V層上面で検出される。調査では、第IV層までを重機により除去し、以下を人力により掘削した。

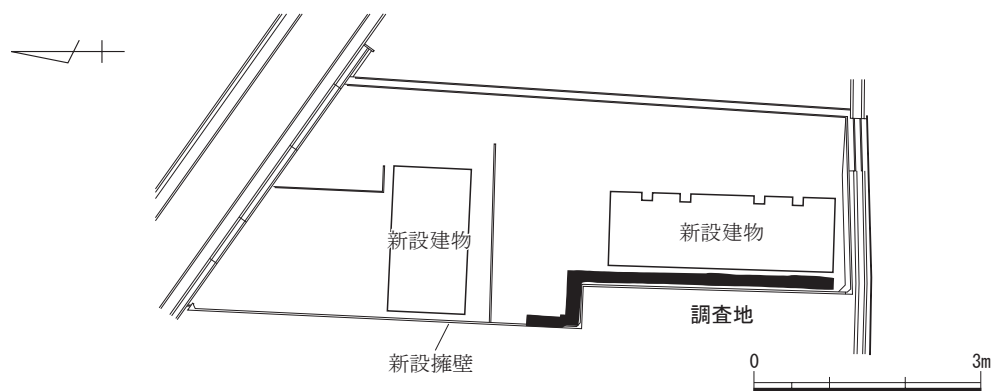
（2）遺構と遺物

室町時代

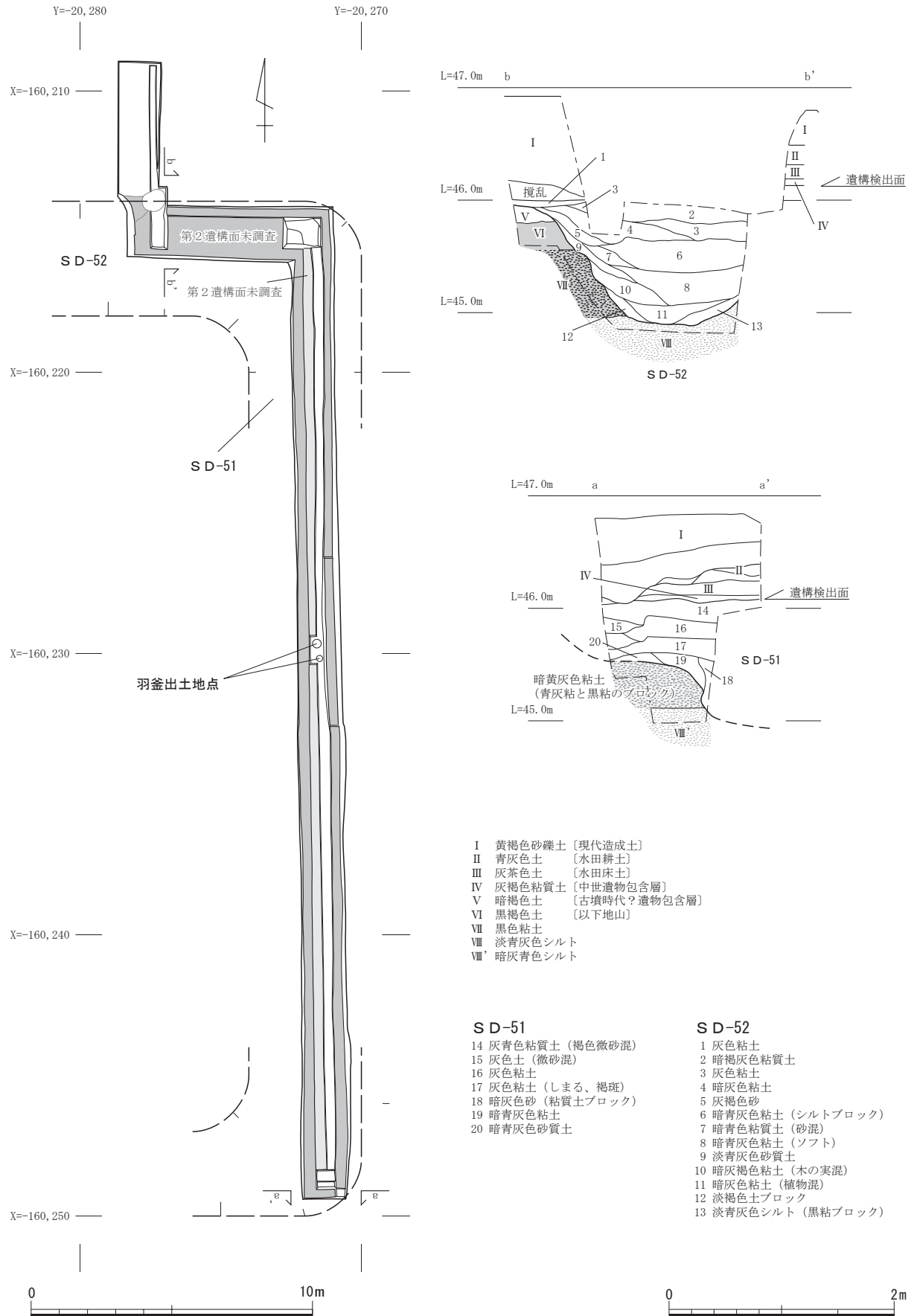
SD-51・52 調査区のほぼ全体が南北方向の大溝内であった（SD-51）。幅不明、深さ1m以上だが不詳。検出面が工事掘削予定面よりも深くなったため、調査区両端などで掘り下げをおこなったのみである。この大溝は、土地境界に沿って設定された調査区の屈曲部に一致する形で北端が西へと屈曲している（SD-52）。溝幅は明らかでないが、深さ約1.2mを測る。調査の結果、室町時代の遺物が出土した（第27図）。このうち、4・6は半完形の土師器羽釜である。

3. まとめ

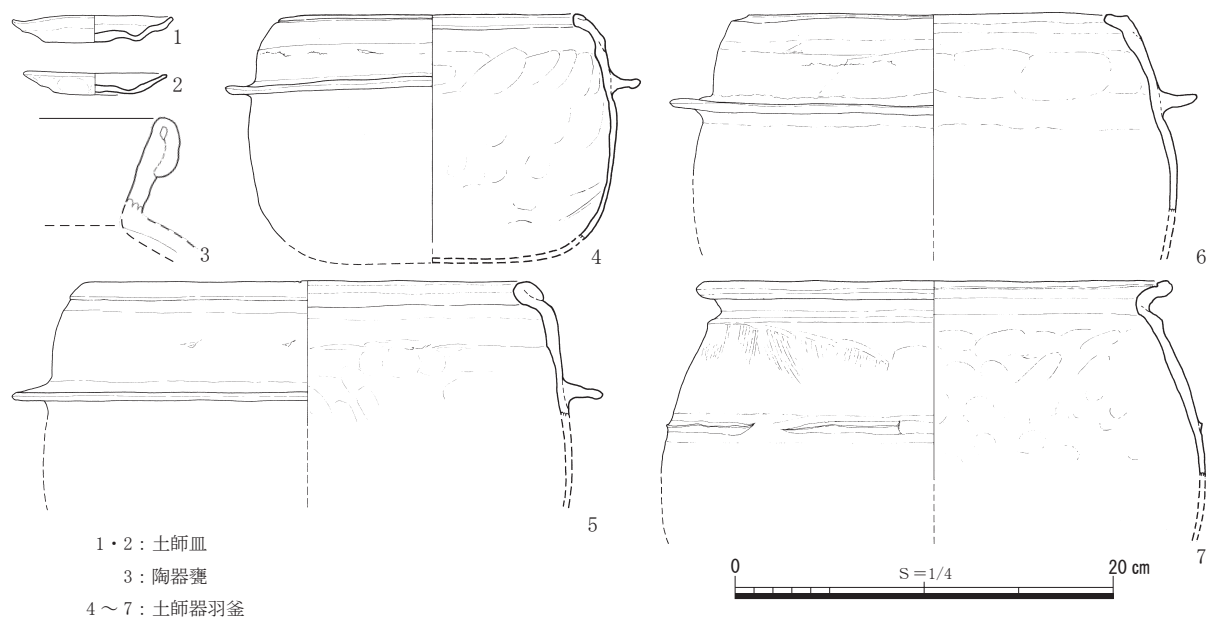
今回の調査では、南北方向の大溝が土地境界に沿って設定した調査区の屈曲部に一致する形で西へと屈曲することを確認することができた。過去の土地境界が現代にも痕跡を残している事例となろう。



第25図 調査区位置図（上：S=1/2,500、下：S=1/1,000）



第26図 遺構平面図および断面図 (左: S = 1/200、右: S = 1/50)



第27図 出土土器



1. 調査区全景（北東から）



2. 調査区全景（南から）



3. S D-52土層堆積状況（北西から）



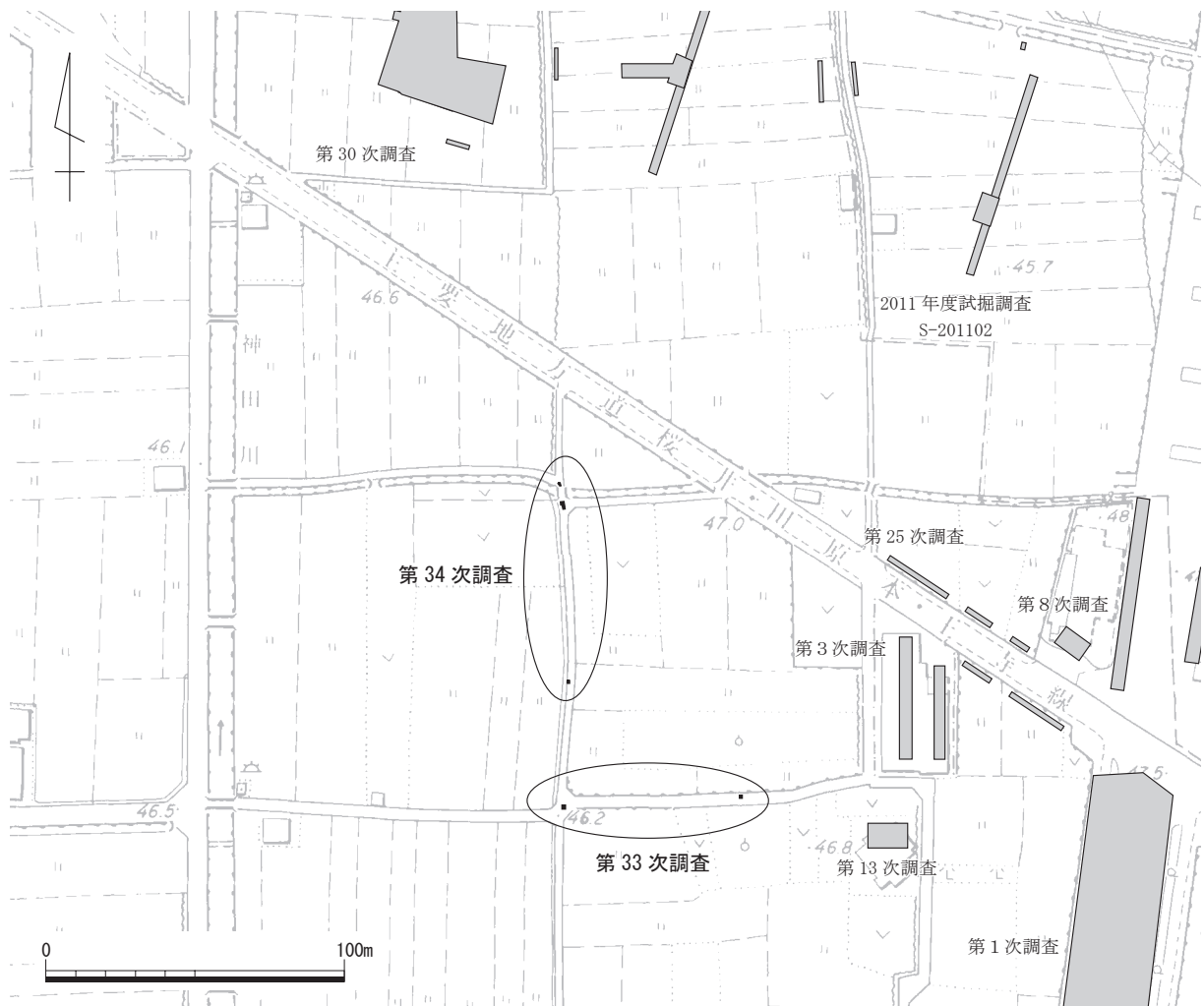
4. S D-51羽釜出土状況（東から）

5. 十六面・薬王寺遺跡 第33・34次調査

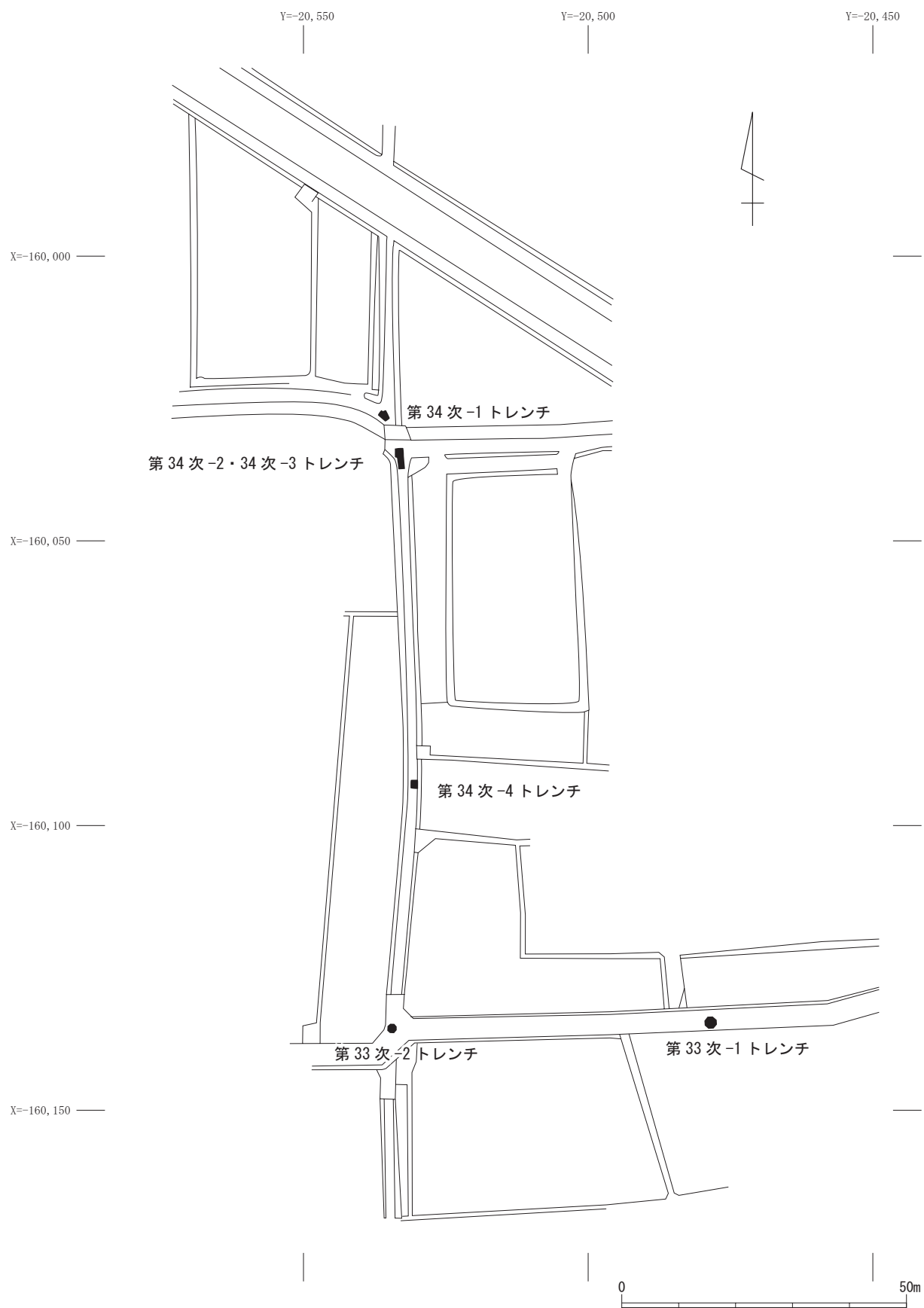
1. 遺跡・既調査の概要

十六面・薬王寺遺跡は、奈良盆地の中央、標高48m前後の沖積地に立地する。これまでの調査で、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。その内容は、弥生時代前期の集落、弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落および方形周溝墓群、古墳時代中期～飛鳥時代の集落および耕地、奈良時代の建物群、中世の環濠屋敷跡等である。中世の環濠屋敷跡は、周囲の小字名から、保津氏の居館跡と推定されている。

今回の調査地は、遺跡北西部に位置する。付近では、東側の第3・13次調査で古代の水田遺構等を検出しているほか、北側の第30次調査で飛鳥時代の河跡・奈良時代の建物群等を検出している。特に、第30次調査の飛鳥時代の河跡は南南東－北北西方向に流れており、その位置関係から今回の調査区付近でも同一の河跡が検出される可能性が考えられた。



第28図 調査地位置図 (S=1/2,500)



第29図 調査区位置図 (S = 1/1,000)

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は舗装された道路および簡易舗装された里道である。今回の調査は下水道工事に伴うもので、第1工期の人坑2ヶ所（第33次調査）、第2工期の人坑4ヶ所（第34次調査）について発掘調査を実施した。第1工期は東から第33次-1・33次-2トレンチ、第2工期は北から順に第34次-1～34次-4トレンチとする。ただし、第34次-2・34次-3トレンチについては近接しているため、結果的に一体となっている。また、第34次-1トレンチは南側に隣接する水路の改修工事時に廃棄されたコンクリート擁壁塊および工事攪乱の影響で、実質的にはわずかな面積しか調査できなかった。ここでは、第34次-2・34次-3トレンチの層序を示す。

I：アスファルト〔検出標高46.4m、以下数値のみ記す〕、II：クラッシャー〔46.35m〕、III：茶灰色土〔46.25m〕、IV：茶灰色土（青みがかかる）〔46.1m〕、V：暗茶灰色土〔46.0m〕、VI：茶灰色土〔45.9m〕、VII：淡褐色粘質土〔45.8m〕、VIII：灰色粘質土〔45.7m〕、IX：淡灰褐色粗砂〔45.6m〕、X：暗褐色土〔45.5m〕、XI：橙褐色土〔45.35m〕

第III・IV層が里道盛土、第V～VII層が近世遺物包含層、第VIII層が中世遺物包含層である。第IX層は古代の洪水による堆積層とみられ、第X層が古墳時代遺物包含層。第XI層以下はベースである。第VI層上面が近世の遺構検出面、第IX層上面が中世の遺構検出面、第X層上面が古代頃の遺構検出面となる。なお、調査地点の里道を挟んで東側の水田が西側の水田より約30cm高くなっており、西側に向かって地形が落ち込む様相と考えられる。

(2) 遺構と遺物

a. 第33次調査

古代

S R-1101 第33次-1トレンチで検出した河川堆積である。幅および深さ不明。遺物は確認していないが、周囲の調査成果から、飛鳥時代頃の河川堆積である可能性が高い。

中世

素掘小溝群 第33次-1・33次-2トレンチで東西方向・南北方向の小溝を各3条検出した。遺物が少ないため詳細な時期は不明だが、中世の耕作に伴う遺構とみられる。

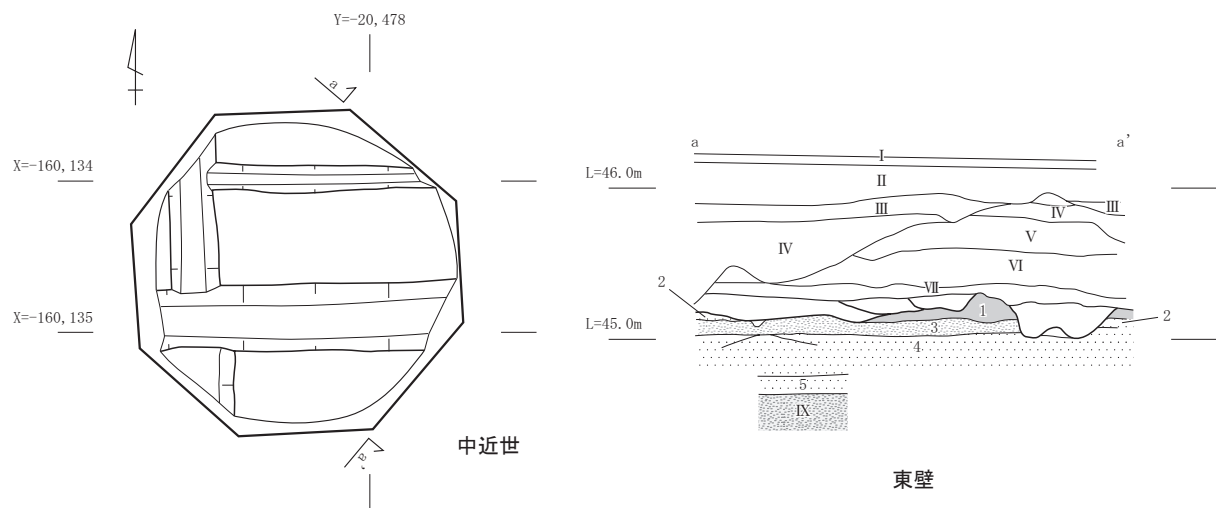
b. 第34次調査

飛鳥時代

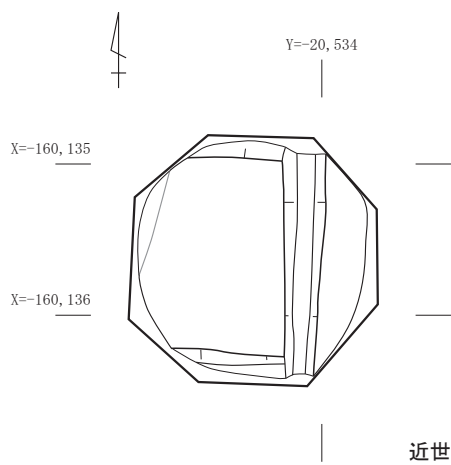
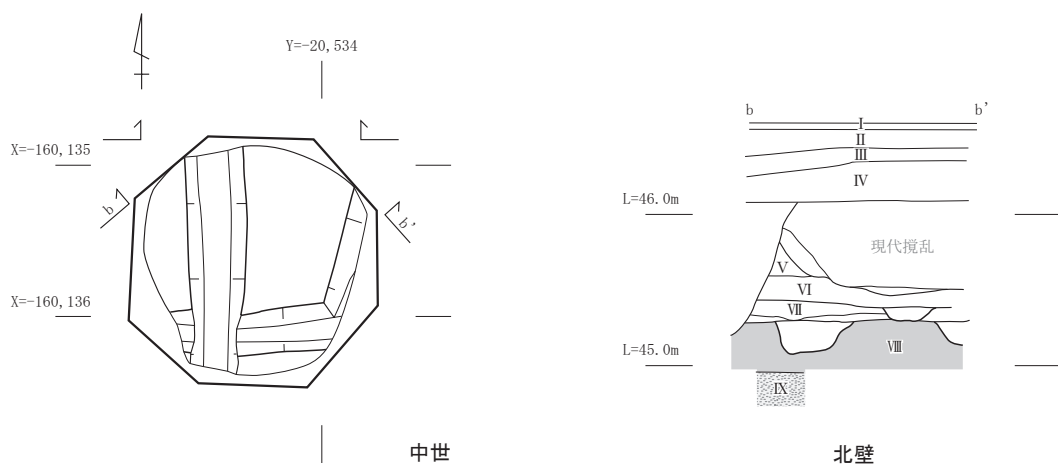
S D-2101 第34次-2トレンチ西端で検出した南北方向の溝跡である。西肩が調査区外となるため正確な規模は不明であるが、幅1m前後となる可能性がある。深さ0.3m。当初の掘削は洪水砂堆積以前とみられるが、粗砂で埋没したのちに再掘削をおこなっているとみられる。遺物が僅少であるため正確な時期は不明だが、飛鳥時代前後の遺構とみられる。

古代

S R-1101 第34次-1トレンチで検出した粗砂堆積を調査区中央で検出した。掘削した面積が狭小であり、遺物も僅少であるため、遺構の時期や性格・規模を明らかにすることができなかった。ただし、周囲の調査成果等から、古代の河跡の一部である可能性が考えられる。



第33次-1 トレンチ



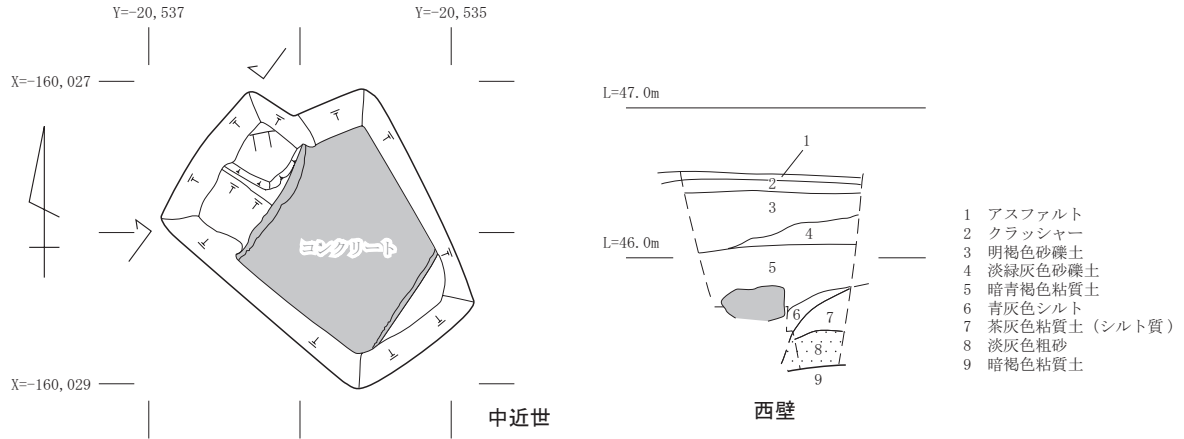
- 1 褐色砂質土〔弥生時代以前の河跡？〕
- 2 褐色粗砂
- 3 灰褐色シルト
- 4 淡褐灰色粗砂
- 5 灰色粗砂

- I アスファルト
- II クラッシャーラン
- III 黄褐色砂
- IV 暗青灰色土
- V 灰茶色土
- VI 茶褐色土
- VII 灰褐色粘質土〔中世遺物包含層〕
- VIII 黒褐色土〔地山？〕
- IX 青灰色シルト〔地山〕

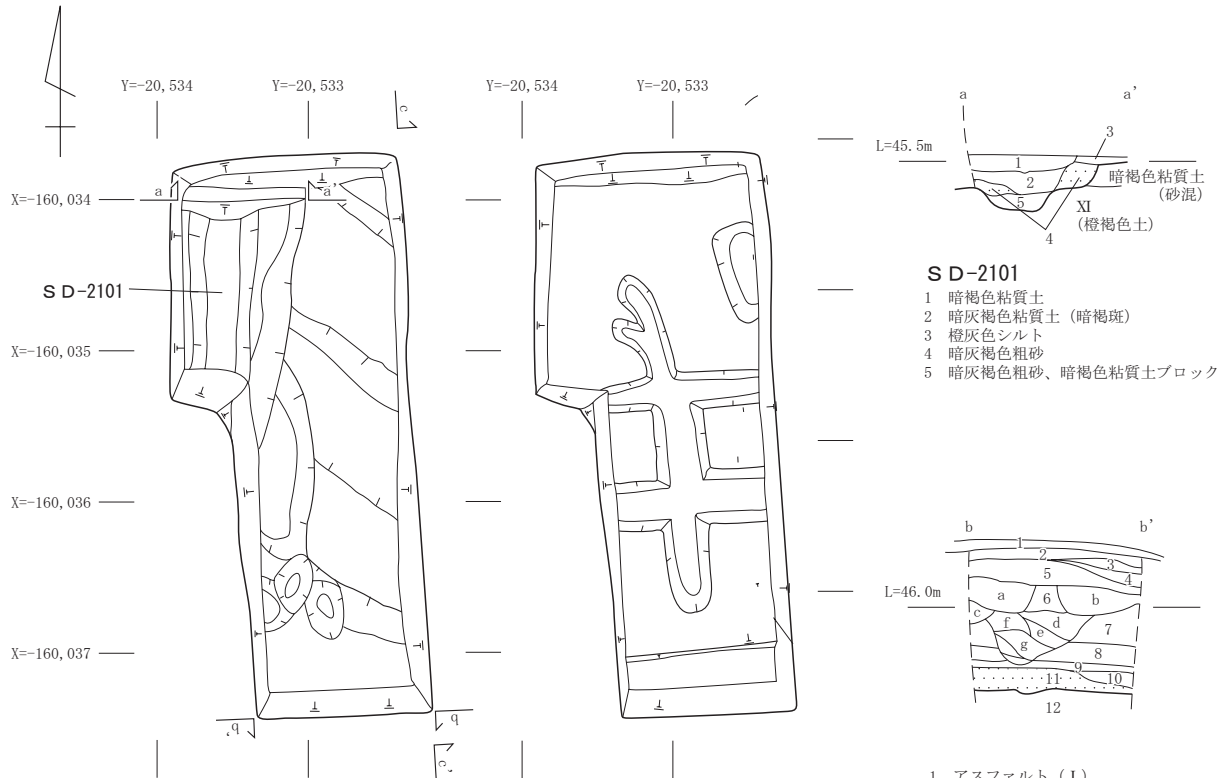
第33次-2 トレンチ



第30図 第33次調査遺構平面図および断面図（S = 1/50）

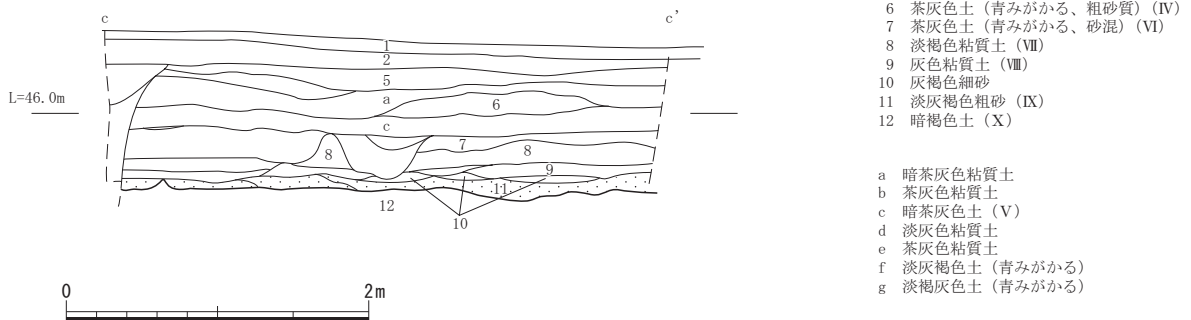


第34次-1 トレンチ



第34次-2・3 トレンチ 古代

第34次-2・3 トレンチ 中世



第31図 第34次調査第34次-1・34次-2・34次-3 トレンチ遺構平面図および断面図 (S=1/50)